『ナメクジはしょっぱいらしかった』

川越隆平

ナメクジは、自分の涙の塩分で溶けながら、「私って都合のいい女じゃない」とようやく気付いたらしかった。

湯気の向こうで、湯船の縁に張りついたその小さな影を見つけたのは、ちょうど露天風呂の湯が夕暮れ色に染まりはじめた頃だった。温泉宿の裏山から引いた湯は、鉄分を含んだ赤茶けた色をしていて、湯面はいつもより少しだけ重たく見えた。

私は湯に肩まで沈みながら、そっとそのナメクジを見つめた。泣いているように見えたのは、湯気のせいか、それとも本当に涙を流しているのか分からない。近づくと、彼女はかすかに震え、溶けかけた体を寄せてきた。

「ねえ、聞いてくれる？」とナメクジは、泡のような声で私に話しかけてきた。

「私ね、誰かのために形を変えるのが癖になってるの。呼ばれたら行くし、求められたら応えるし、嫌われたくないから、溶けることだって厭わない。気づいたら、いつも誰かの都合のいい存在になってるの」

私は湯の中で指を動かし、そっと彼女の近くに置いた。触れたら溶けてしまうのだろう。だから触れずに、そっと寄り添った。

「でもね」とナメクジは続けた。「温泉って不思議よ。溶けていくのに、気持ちいいの。自分が薄まっていくのに、楽になるの。ああ、私って、こうやって誰かの中に混ざっていくのが好きだったんだって、気づいちゃった」

湯気がふわりと揺れ、山の向こうから風が吹いた。硫黄の匂いが鼻をくすぐる。

「でも、それって幸せなのかな？」と私は聞いた。

ナメクジはしばらく黙っていた。湯の縁に残った彼女の体は、もう半分ほどになっていた。

「わからないわ」と彼女は言った。「今日ここに来て、初めて自分の涙の味を知ったの。しょっぱいの。ほんとうよ。その瞬間、誰かのためじゃなくて、自分のために溶けてるんだって、気づいたの」

私は湯から上がり、タオルで体を包んだ。夕暮れはすっかり夜に変わり、露天風呂の灯りが水面を照らしていた。

振り返ると、ナメクジはもうほとんど形を失っていた。湯の表面に淡い光の筋が揺れていて、それが彼女の最後の言葉のように見えた。

「ねえ、あなたはどうするの？」と、湯気のような声で、ナメクジは私に聞く。

私は答えられなくて、代わりに湯の中に手を入れた。湯の中に溶けた彼女の涙の塩分が、私の指先に触れた気がした。それはほんの少ししょっぱくて、でもどこか甘かった。

私はタオルを握りしめ、夜風の中を歩き出した。山の匂いが胸にしみる。明日の朝、もう一度温泉に入ろうと思った。彼女の残した塩分が、まだ湯のどこかに漂っている気がしたのだ。